

## 認知症と共生する社会へ向けて ⑦

ここまで、2023年9月～12月にかけて、岸田総理を議長として首相官邸で行われた「認知症と向き合う幸齢社会実現会議」で議論されたポイントを解説してきました。これからわが国では、認知症と共生する社会を実現しなければならないのは明白です。



一方で、ひと言で「本人主体で認知症と共生する」「本人の尊厳を守り希望を実現する」と言っても、認知症の症状や程度、本人の年齢や家族構成によって、どのように社会との共生を目指すのか、周囲が何をすればよいのか、はたまた社会と共生することそのものが可能なのか・・・など、結局のところは理想論なのではないかと感じてしまわれる方もいらっしゃるかもしれません。

認知症が進行すると、どうしても「何も覚えられない」「何も理解できない」と決めつけてしまいがちです。しかし認知症は、出来事そのものを理解できず、またすぐに忘れてしまうことも良くありますが、その出来事が起こったときの感情だけは体内の記憶に残っていることが多くあります。嬉しかった、安心した、楽しかったという記憶、その一方で、悲しかった、怒りがこみ上げたという記憶、それぞれが脳に刻まれ、その後の感情の表出や行動に影響があるのでしょうか。

現在は、「認知症です」と言った途端に「何も分からない人」「取引ができない人」「買物や外出も危険な人」「一人暮らしが出来ない人」という評価を与えられがちです。

ある80歳代後半の一人暮らしの女性Sさんの話しです。夫が末期がんで入院している頃から認知症が進行し、夫の死亡後も「主人が帰ってこない」と言っでは、近所の交番や入院していた病院に何度も訪れるそうです。夫が亡くなったことは理解できていませんが、道に迷うこともなく、ATMで生活費を引き出したりスーパーで買い物をしたりすることはできます。遠方に長男と長女の2人の子供がいますが、2人とも子育てと仕事が忙しい状況で、現在もSさんは一人暮らしをつづけています。そんなSさんは、夫が入院する前から、自宅から徒歩5分ほどの喫茶店（コメダ珈琲）に通うのが日課です。

Sさんの子供たちは、母親が認知症で一人暮らしをつづけていることについて、周囲の人たちから「お母さん、おひとりで暮らしているの？それは心配ね。」「施設に入ってもらるか、ご一緒に住むかしてあげないと、危ないわね」などと口々に言われてしまうことで、大きなプレッシャーを感じていました。

というのも、Sさんは「要介護1」の認定を受けているものの介護ヘルパーが自宅に来るのを拒否し、子供たちが家に様子を見に来るのは歓迎しますが、泊まったり同居したりする提案には明確に拒否します。つまりSさんは、出来ていないことや不便なことがあったとしても、ひとり暮らしをつづけていたいという希望を持っているのです。

さて、Sさんの一人暮らしの行方と、子供たちの対応については、次回、お伝えいたします。

つづく